
短編小説 彼岸

くりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編小説 彼岸

【Nコード】

N3338V

【作者名】

くりこ

【あらすじ】

墓参りに来た秋雄に春代が告げたのは……
若かった当時を二人で偲びます。
ちよっぴり切ない大人のラブストーリーです。後半にクスッと笑っていただけなら嬉しいです。

他サイトにてくりこ名義で掲載済み作品を転載しています。

買ったばかり。と、思っていた墓も、字を彫った部分に苔が生えていた。

秋雄はそれを丹念にブラシをかける。すっかり洗いあげたところで線香を薰き、故人の好物だった素麺を供えた。

ぬるい風が秋雄の頬を撫ぜた。傍らにたたずんでいた春代がふと笑った。

「あら。コンビニの素麺かあ。揖保の糸が良かったかも……」というか、ここ。お供え物は禁止よ。カラスが荒らすからって管理事務所の注意書きにあったでしょう」

「……いちいちうるさい奴だなあ。帰る時に回収するよ。持って帰って俺が食べるよ。大体、お前はいつもそうやって水を差すんだ。人の気持ち、好意だけ汲み取ればいいんだよ」

「……貴方が人の気持ちをどうこう言える人間になったとはねえ。うふふ。でも……もう少し早く気付いてくれれば、良かったのになあ……」

「まーたソレを蒸し返すのか？ よせやい。だからこうして、毎年彼岸にはちゃんと墓参りへ来てやってるじゃないかよ……」

早咲きのしだれ桜の下。風にそよぐ枝と共に、ふわりふわりと揺れる春代は霞んでいる。彼女は儚げに秋雄を見やる。

「まあ、そうねえ。度々会いに来てくれるのは感謝してます。ただ……もう良いわよ、秋雄さん」

秋雄がうんざりした風に春代を見上げる。

「おい。お前は人の話を聞いてないのか？ 人の気持ちを無下にするな、と言ったばかりだろうが」

春代が首をすくめる。いたずらっ子のように小さな舌を出したあと。秋雄が好きな仕草であつたが、恨み節が重なつた。

「……お言葉ですけどねえ。死んだ元妻の墓参りに、可愛い現彼女を連れて来る貴方はどうなのよ？」

ぶっ！ と秋雄は缶コーヒーを噴出す。狼狽は隠せない。元夫は慌てて口元をぬぐった。

「う……それは、そのアレだ。この後、花見して富士山のまわりをドライブにでも連れて行こうかと……」

「貴方ねえ。車で待たされてる彼女の身にもなつてあげてよ？
大体、私へだって失礼じゃない。変な性格の女なら、そのままとり憑くわよ？」

春代は胸元でだらりと手を下げ、いかにも幽霊といったポーズをとる。

秋雄はぼりぼりと頭をかいた。

「参ったなあ……バレてたのかよ」

秋雄は、駐車場へ彼女を待たせたままで墓参りをしていたのだった。春代がふわりと自身の墓石上に腰掛け、元夫を見下ろす。白いドレスが彼女の愛らしい顔をいつそう引き立てた。少女のように笑む春代は、しんみりと告げた。

「だからさ。もういいよ、ここへはそんなに頻繁に来なくて。それに……私ももう、こうして会いには来れないし……」

秋雄が目を見張る。

「何でだよ？ 寂しいこと言うなよ、お前……」

「だって……そうゆうルールらしいもん、なんか。そろそろね。ちやんとしなくちゃいけない時期が来たみたいでさ……」

元妻の言う時期。その意味合いは何となくニュアンスが伝わり、秋雄は言葉に詰まってしまった。春代が優しく囁く。

「私をまだ愛してくれてたのねえ、貴方……」

「……じゃなきゃ、こんな所まで度々来ないさ。都心から高速使っても三時間だ。お前が富士山が見たいって言うから、わざわざこんな遠い所へ……」

「その気配りを生前にして頂けたらねえ。私達、もう少しうまく仲良くやっていけたのになあ……」

二人は、既に終った仲だった。

秋雄の仕事が忙しくなり、夫婦の間には深い亀裂が生じていた。まるきり仕事のせいだけで無いのは、秋雄自身がよく知っている。元夫はうなだれた。

「……失ってから気付くもんだって、あるんだよ」

春代が秋雄の頬へ手をやる。白く美しかった手指はガラス細工のようだ。もう一度彼女が静かに尋ねた。

「私を愛してくれてた？」

秋雄が春代を見上げ、目を細めた。

神前で永遠の愛を誓った時。傍らにいたのは、この白無垢姿の彼女だった。

今そこにも、若く美しい花嫁へと戻っている春代に、懐かしむよう秋雄は昔を振り返った。

「君が僕のところへ嫁に来てくれた時は……本当に嬉しかったんだ。君は人気者だったからなあ」

「だけど、私は最初から貴方が好きだったんだもん……」

大学のサークル仲間達の輪の中。就職した職場でも、愛嬌があり活発だった春代は人気の的だった。

だが、彼女は秋雄を選んだ。

秋雄は彼女の細い手を握り締めた。若かった二人はいつまでも共に歩いてゆく事を約束した。

「僕みたいなクソ真面目の堅物を選んでくれたのは、夢みたいだった。あの時は……絶対に必ずお前を幸せにしてみせると誓ったのは真実だ……」

約束はいつしか違えた。月日が流れて、秋雄は他の女へと移り気した。

春代がこの世を去ってから。秋雄は失ったものの大きさに、改めて気付いた。そして今また失おうとしている。

秋雄は懺悔するように春代の足袋を履いた小さな足に触れようとしたが、感覚は無い。

式当日の出来事がよみがえる。

式場の控室。初めて目にした花嫁衣装姿の春代に、胸が一杯になったのを思い出す。『草履の鼻緒が痛いのだよ』と、顔をしかめて笑った花嫁がたまらなく愛おしくて秋雄は思わず抱きよせていた。

苦笑いした秋雄の目尻に滴が溢れた。

「どうして……あのままの気持ちでいらなかったかなあ……俺達は……」

「最後の最後に。こうして戻れたから、いいじゃない。色々あったけど楽しかったよ……ありがとう、秋雄さん」

春代はスツと秋雄の側へ寄る。そして、ふんわりと唇を重ねた。桜のような甘酸っぱい薫りが触れる。耳元で微かに花嫁が囁く。

（バイバイ！ 彼女は、ちゃんと大事にするのよ……今度は逃がさ

ないで……)

風が舞う。

桜吹雪きが花嫁を包み、天上へと誘う。

残された元夫は、両手で顔を覆い泣き崩れた。

運転席へ秋雄が戻る。カーラジオを聞いていた助手席の彼女は、彼の頬へ張り付いた桜の花びらを黙って取り除いてやった。

ゆつくりと走り出す車。サイドミラーを、彼女がじっと眺めたまま尋ねた。

「前の奥さん……って、髪にウェーブがかかってる？ 肩までの髪を」

秋雄はハンドルを握ったまま、「そうだよ。何で知ってるのさ」と驚く。

彼氏に構わず、彼女は事も無げに続ける。

「彼女が最後一緒に居た人って……たしか外人さんだったけ？」

秋雄は合点がいき「ああ」と苦笑した。

「そう。サンフランシスコの赴任先で俺が君と会ってる間。あいつはあいつで、宜しくやっていたんだ。地元の彼氏とボートで海へ出て、あの事故に遭った。まあな。好きな男と一緒にだったから本望かもしれないな……」

ミラーには仲睦まじい、しかし輪郭の薄いカップルが映っている。こちらへ大きく手を振る彼らに、彼女も苦笑しながら応えた。

「どっちもどっち、ってとこね……でも、まあ幸せそうで良かったわ。彼氏、良い男だし」

「そうかあ？」と秋雄が笑う。しかし、男はバックミラーを振り返ることはなかった。かわりに傍らの彼女へと笑いかけた。

「腹減ったなあ。なんか食べるか？」

「そうね。この辺は何？　吉田うどんが美味しいんだっけか……」

彼女は窓を開け放つ。緑色になりだした樹々たちから、爽やかな新しい風が流れてきた。秋雄がああ、と小さく呟く。

「いけね。素麺……忘れて来たなあ……」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338v/>

短編小説 彼岸

2011年10月8日19時12分発行